

## 紐帯の強化、紐帯の断絶

### 外部からの被災地復興支援のあり方をめぐって

李仁子（東北大学）、金谷美和（国立民族学博物館）

人類は集団を形成することで生存要件の獲得を容易にし、また社会秩序の保持を実現してきた。どのような契機で人は集団を作り、それをどのように維持もしくは解体するかは、人類学において主たる研究テーマの1つであった。大規模な自然災害が引き起こす社会の異常事態は、この課題の重要性を繰り返し我々に提示してやまない。なぜなら、集団の解体と再構築は人々の生存要件の確保と深く連関せざるを得ないからである。その証左に、現代日本をおそった未曾有の自然災害である東日本大震災の直後から、被災地の「コミュニティ」に注目が集まり、「絆」に代表される言葉が被災地の現状や将来像を語る際に多用された。一過性の注目や用語に終わらせることなく、学問的にとりくむことは自然災害大国に住む者としての責務であると考えます。

本研究の対象地は、東日本大震災の被災地のうち、津波の被害が甚大であった沿岸部地域である。当該地域は、血縁関係、親族関係が何世代もわたって重ねられてきた地域であり、そこに住む者は同一集落内に暮らすがゆえの近隣意識や協働関係で結ばれ、集落ごとのコミュニティの存在やそのなかでの人と人とのつながりが多くの住民にとって必須のものであるような地域であった。集落という物理的基盤を津波で失い、地域のほぼすべてのコミュニティは一時的に解体した。沿岸部の被災者の多くは、もともとの居住地が防災集団移転促進事業の対象地となったために居住地の移転を余儀なくされ、しかも集落の人々がバラバラに移転せざるを得ない状況にあった。しかし、そのような状況下にあっても、被災者はさまざまな方法で元のつながりを取り戻したり、つなぎ直したり、新たに作り上げたりしていたことは、これまでの発表者らの研究で跡付けられている（李 2016）。

本発表で論じられるのは、復興支援というかたちをとって外部の団体や個人が被災地にはいつてきた際に、それらの支援活動が地域社会の紐帯に与えた影響である。ボランティア等の外部からの働きかけが被災地の紐帯を強化した事例と、紐帯を断絶させた事例を対比的に論じたい。

具体的には、まず紐帯を強化した事例として仮設住宅を拠点に展開された、ある手仕事グループをとりあげる。震災後の比較的早い時期から、手仕事を媒体とした被災者支援が外部ボランティアによって行われ、多くの被災者が活動の輪に加わった。手仕事は、言葉を交わさないでも成立する共在性を有しているため、

被災者が、被災経験について言葉にすることができない状況にあつてケアをもたらし、一緒に何かをつくる作業が人々をつなぐに開いていった（金谷 2016）。時とともに支援活動は多様なかたちで展開され、仮設住宅におけるボランティアの手芸教室、制作された手芸品の「震災復興グッズ」としての商品化、手仕事での起業の支援などがみられた。本発表では、もともとあった紐帯が受け皿となって、外からの働きかけをうけいれたり、発展させたりしたことを示すと同時に、外部からの支援が従来の紐帯を強化した過程を明らかにする。

他方、紐帯を断絶させた事例としては、ある地域復興プロジェクトをとりあげる。そのプロジェクトは、地域住民や観光客が集える場所づくりとその運営に関する事業であり、外部の団体が主導したものである。プロジェクトの活動報告書では地域コミュニティが主体となって推進されたと紹介されているが、その実態は、事業助成金獲得の目的から、地域コミュニティ主導を装うために特定の地域住民を利用したり他を排除したりしながらすすめられ、結果的に地域コミュニティの紐帯を断絶させてしまった。そのような支援事業は被災地では複数観察されているが、報告書などのうえでは地域住民が主体となった、あるいは包含した活動として成果が提示されるため、その実態がみえてこないことが多い。

自然災害後の社会変化を短期的な時間軸で理解することは困難である（金谷 2018）。とはいえ、東日本大震災から8年が経過する現在、震災直後から変化の波に洗われ続けた被災地の社会的紐帯の現状を、その一面なりとも明らかにすることには意義があると考えます。

#### 参考文献

- 李仁子 2016「被災者の生活再建と「つながり」の諸相——被災地の民族誌に向けての一断章」分科会『被災地の民族誌——つながりの解体・再編・生成をめぐって』日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学。
- 金谷美和 2016「手仕事グループがつくる「つながり」の諸相——東日本大震災被災地の調査から」分科会『被災地の民族誌——つながりの解体・再編・生成をめぐって』日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学。
- 金谷美和 2018「大規模自然災害後の集団移転と「社会変化」——インド西部地震被災地の事例から」日本文化人類学会第52回研究大会、2018年6月2日、弘前大学。

キーワード；東日本大震災、社会的紐帯、被災地、復興支援